

私が勝利したって仕様が**ない**ではないか、神が勝利するの だ、馬鹿め！

Greatchain
July 03, 2024

私は「私事」というものに触れるのを、ひどく「はしたない」ことだと思っている。私事は差し控えるのが礼儀というものである。しかし事情が事情なので、私はまるきり反対のことをしなければならぬ。その上で話すことをご承知ねがいたい。

自分では記憶が全くないが、私の母が、私の言ったことを笑いながら身内で自慢していたことがある。私の家へ何人かの子どもが遊びに来ていた。おそらく私が最年少だったと思う。その子たちが急にどこか行こうとして、一斉に外へ飛び出した。遅れた私が「おーい、こどもたち、靴をはかせてくろよー」と叫んだという。靴もはけないくせに、自分より大きな子たちを「子供たち」と呼び、「靴をはかせろ」と命じた。これは私の、可愛いが、幼児にあるまじき傲慢さを、よく表わすエピソードである。こういう傲慢さが子どもの間で許されるはずがない。私は小学校を少し上になると、大勢の前でしゃべれないほど、気が弱いにもかかわらず、徹底的にいじめられた。しかし私は幼児の時と同じ威厳をもっているため、絶対に負けなかった。そのために、それほど残酷な目には遭ったわけではない。そして、親にはこれは口が裂けても言えないことだと思っていた。**他者の卑劣が自分のことのように恥ずかしかった**からである。それは当時でも、90歳の今でも全く変わらない。

あるとき母が、「どのクラスでも必ず悪い子がいるのに、うちの子のクラスだけは、不思議に、みんないい子ばかりなのです」と自慢げに言っていた。私はこのとき、よし勝ったと思いき、密かに快哉を叫んだ。とはいえ私がかなり苦しんだことは間違いない。これは私が、一生を通して苦しみを背負っていたことを認めてくださる（アカシック・レコードの？）方の、言われる通りである。

もう一つ、私の子ども時代のエピソードをあげておきたい。私が小学校へ上がる前、同い年の農家の子が遊びに来て、当時たくさんいた蜂の子の食べ方を教えてくれた。それは、取った蜂の子を桑の葉に包み、少し塩をかけて蒸し焼きにするものだった。その子のやさしさが、一緒にいた母と私に強い印象を与えた。

それから私が高校を卒業したころ、この小学校の同窓会があり、彼も出席していた。彼とは少学校以来、会ったことがなかったが、会った途端に劇的なことが起こった。私がボロボロ涙を流すと全く同時に彼もボロボロ涙を流した。こんな体験は長い生涯で、初めてだった。幸い、見ている者はなかったと思う。実は小学校の間、私につらく当たる者のうち、彼だけがそれに加担しない者の一人だった。彼とは特別、仲よくした記憶がないのに、抑え込まれた双方の感情が一気にあふれ出したに違いなかった。

もう一つこれは、本当は話したくない嫌なことがある。私は危うく殺されるところだったのである。当時は、子どもたちが全員参加する相撲大会があり、私は身体が弱い上に、戦うということが嫌だったので必ず負けていた。しかし一度だけ、相撲の絵本で「外掛け」という手があることを知っていたので、これを掛けると相手は簡単に負けた。そのときの彼の屈辱は想像できるだろう。これが、彼が私に悪事を企むきっかけになったことは、あとで知っていたのだが、同級生はこれを後々まで、ほとんど知らなかった。私は泳げないのに、友達と大川へ水浴びに行くことがあったが、あるとき、この子が人と謀って、私を溺死させようとしたらしい。それは、そのことで彼を強く責めた別の子がいたことで、わかったのである。

それは、やがて彼の良心を苦しめる事件となり、彼はその後、どこかへ転校し、同窓会には絶対に現れなくなった。しかしほとんどの者が、いまだにその理由を知らないでいる。万一、彼が生きていれば、私は全く何も知らないふりをして、彼と思い切り楽しく遊びたいと思う。そして背負い続けた良心の苦しみから、彼を解放してやりたい。そして最後に強く抱きしめて別れたいと思う。

さて、話題を変えよう。先日私は、この宇宙の底には、この上なく深い悲しみと、この上なく美しいものが一つになって存在する、と言った。私はそう観じたときに、悪に対処することが可能になる、と言いたかったのである。しかしそう考えず、全くマイナスの陰惨なことを言っていると思った人があるらしい。悪に対して、憎しみや恨みをぶつけても、何も解決しないことは誰でも知っているではないか？ それは究極の深い世界では「悲しみ」として存在しなければならない。そしてそれが、美しいものに変わるのでなければならない。私は芸術的感性について言っている。

モーツァルトの曲がそのような悲しみを漂わせている。余談だが、私はかつて Salieri on Mozart という題でソネットを書いたことがある。その中で、that sadness like blue sky (あの青空のような悲しみ) という言葉を使い、褒められたことがある。私のいう「悲しみ」の意味はそのようなものである。

悪（純粹悪）というものがこの世界に存在するが、それは「話せばわかる」とか、「やがて良心に目覚める」とかいったものではない。この悪はそんなものではない。それは「神を殺すまで戦う」思想である。そんな激しい言葉を報道で使わないために、騙されているだけである。だから我々は、実は、世界を2つに分けて住み分けるしかない。今、そこまで情勢は煮え詰まっている。世界を2つに分けて、悪側と戦うのではなく、悪を自滅させる戦略がなければならない。かつて考えたように、神は全知全能ではない。我々が神に加勢して勝利させなければならないのである。